

霧の夢

134 ラ・サール学園 鉄道研究会

私はホームにいた。どうやら寝過ごしたらしい。改札へ向かおうと階段を降りる。通路には霧がかかっていた。抜けると、改札が見えた。明るそうな場所だった。通り抜けた。

「いらっしやいませ」

人の声がした。カフェがあるようだ。どうして無人駅に人がいるのか、と不思議には思ったが、コーヒーを買い、朱色の古風な駅舎を出た。

澄み渡る青空、美しい霧島の山々、古風な駅前ロータリー、お洒落な足湯、地域の人々の賑わい、こんなに美しい場所があったのかと心を洗われた。足湯に入る。

陽の光に包まれるかのような温もりを感じ、力が抜けた。コーヒーを飲む。香りがよく、ちょうど良い温かさのコーヒーが体に沁みてくる。こんなに心地よい気持ちになったのはいつぶりだろうか。突然周りに霧がかかった。

「おい、起きろ。寝てるんじゃないよ」

気づくと授業中の教室にいた。

霧は晴れていた。